高等学校

平成10年度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

平成10年度

教育研究員（高校・地理歴史）名簿

科目	所属	氏名
世界史	都立八潮高等学校	千葉　由美子
	都立大山高等学校	福嶋　滋嗣
	都立八王子北高等学校	松崎　賢一
日本史	都立南高等学校	谷口　靖
	都立桜町高等学校	佐藤　文泰
	都立松原高等学校	岡田　明
	都立水元高等学校	高嶋　薫
地理	都立大泉北高等学校	宇治川　秀
	都立城北高等学校	藤本　佳司
	都立秋川高等学校	柴田　祥彦
	都立第五商業高等学校	山田　和利

担当　東京都教育庁指導部高等学校教育指導課　指導主事　宮本久也

研究主題

国際社会に生きる人間として自ら考え行動できる資質を育成する授業展開の工夫
ー 生徒の学習意欲を引き出す授業をめざして ー

目　　次

主題設定の理由と研究の経過 …… 2

Ⅰ　科学技術の発展から派生する問題 …… 3

1　西洋医学の導入がもたらしたもの …… 3

2　原子爆弾を生んだ科学者たちの反核運動への取り組み …… 5

3　ペットボトルから見るゴミ問題 …… 7

Ⅱ　経済の発展から派生する問題 …… 9

1　足尾鉱毒事件は今
── 足尾と谷中村はどうなった！ ── …… 9

2　「南北問題」と開発援助 …… 11

3　国境を越えた労働力移動
── 外国で働くこととは ── …… 13

4　王安石の財政改革と宋代の国際関係 …… 15

Ⅲ　人と文化の接触・交流・共生 …… 17

1　岩瀬忠震と日米修好通商条約 …… 17

2　大正デモクラシーが生み出したもの
── 「人間に光あれ」叫びは続く ── …… 19

3　新しいパートナーシップを求めて
── 世界と日本の先住民族 ── …… 21

4　「地球市民」の育成をめざして
── クロアチアナイーブアートの体験を通して学ぶ文化と心 ── …… 23

研究主題

国際社会に生きる人間として自ら考え行動できる資質を育成する授業展開の工夫

－ 生徒の学習意欲を引き出す授業をめざして －

主題設定の理由と研究経過

科学技術の進歩や経済の発展は、国際化や世界の一体化など社会の各方面に大きな変化をもたらしている。このような社会の変化は、高校生に対しても通学することや学習することに対する意識の多様化、命や人間関係、労働などに対する価値観の揺らぎを生み、自らの生き方在り方を見出せない状況をもたらしている。社会の変化に主体的に対応できる青少年の育成は、今日の教育の重要な課題である。そこで本部会では、現代社会の諸課題について地理的・歴史的な見方・考え方を培う授業を通して、生徒に主体的に学習に取り組ませ、問題意識をもって自ら考え行動する力を育むことを目的として、以下の視点から研究に取り組んだ。研究を進めるにあたっては、特に生徒が意欲的に学習に取り組めるような指導計画の作成に留意した。

Ⅰ　科学技術の発展から派生する問題

科学技術の発展は、「空を飛びたい」「遠くの人と話がしたい」「伝染病をなくしたい」などの人々の夢や願いを実現させ、便利で快適な生活を可能にした。しかし一方で、全人類を瞬時に滅ぼすことが可能な核兵器の開発や、大量消費によって発生したゴミなどの廃棄物による大気汚染や水質汚濁にみられる環境破壊などの地球的な課題をもたらした。21世紀に向けて、科学技術の発展の現状と課題を認識し、課題の解決に向けて取り組むことが求められている。そこでこのグループでは、科学技術の発展から派生する問題を認識し、「明るい未来」の実現に向けて生徒自らが考え、行動できる資質を育成する授業展開の工夫を試みた。

Ⅱ　経済の発展から派生する問題

現代社会における経済の発展は、国家や民族、イデオロギーといった枠を越えて、様々な人々や地域に大きな影響を与えている。経済の発展とグローバル化は、人々の生活に豊かさをもたらす一方で、環境保護や地域開発、南北問題、労働力の流動化、国家財政の破綻などの様々な課題をもたらした。これらの諸課題の解決のためには、基本的な知識と深い洞察力、人権尊重の精神に基づいた一人一人の主体的な行動が求められている。特に、経済分野で世界的に大きな影響力を持つに至った日本は、今後の国際社会の安定に責任を果たすことが期待されている。そこでこのグループでは、国際社会の未来を担う人間として生徒が自ら考え、行動できる資質を育成する授業展開の工夫を試みた。

Ⅲ　人と文化の接触・交流・共生

国際化や世界の一体化が進み、人や文化の接触や交流の機会が増加する中で、多くの複雑な問題が生じている。その背景には、人々の意識、倫理観、価値観やそれらを生み出した文化・社会の多様性があることを忘れてはならない。このことを踏まえ、社会の様々な矛盾・問題を認識しつつ、自己理解を深め、異文化を理解かつ尊重し、他者との共生を図る生徒を育成することが求められている。そこでこのグループでは、人や文化が交流する際に必要なこととして、多様な文化の存在、人権尊重の精神、自ら行動する姿勢に着目し、国際社会に生きる「地球市民」としての資質を育成する授業展開の工夫を試みた。

Ⅰ　科学技術の発展から派生する問題

1．西洋医学の導入がもたらしたもの

(1)　**教材として取り上げた理由**　　医学の進歩により、多くの難病が克服されるようになり、また、衛生や病気の予防に対する人々の認識が高まった。その結果、日本では乳幼児の死亡率が大幅に減少し、平均寿命も80歳を超えるようになった。現在の日本の医学は、西洋医学が主流であるが、5世紀頃にはすでに中国から東洋医学が伝来し次第に普及していった。16世紀中頃からはヨーロッパとの接触が始まり、最新の西洋医学がもたらされたが，その後の鎖国政策によって西洋医学は沈滞した。しかし、18世紀前半以降、西洋の学問に接する機会が増加し、西洋医学などの学問は、知的好奇心や向学心、人命を救うという使命感をもつ人々の間で広がっていった。西洋医学が伝わり普及していく過程を学習するなかで、ヨーロッパの学問が日本に与えた影響を生徒自身に考えさせることを目的として本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時では、蘭学者（洋学者）の多くが単に西洋の知識や技術を身につけただけでなく学ぶ課程で幕藩体制の矛盾に気づき、そのことが身分制の崩壊と倒幕への流れにつながったことを理解させる。学習指導要領での関連分野は、「日本史Ａ」の「(3)日本の近代化への未知と19世紀の世界」の「イ　新思想の展開と教育の普及」、「日本史Ｂ」の「(4)幕藩体制の推移と文化の動向」の「エ　国際環境の変化と幕藩体制の動揺」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○東洋医学について	○具体的な例として各自、または互いにツボを押し「五臓六腑図」を見る。 ○東洋医学の基本は投薬と鍼灸であることを知り、西洋医学との違いを理解する。	「ツボ図」、 「五臓六腑図」
展開	○西洋医学の流入について	○16世紀中頃、イエズス会宣教師によって西洋医学が伝えられたこと、鎖国以後、オランダ商館の医者から医学が伝えられ続けたことを理解する。	資料「出島図」
	○西洋医学の発展発展について	○徳川吉宗の漢訳洋書輸入解禁、青木昆陽のオランダ語入門書により蘭学が盛んになったことを知る。 ○杉田玄白らの腑分けについて知り、『解体新書』として出版する際の苦心を理解する。	史料『解体新書』 ・『蘭学事始』
	○シーボルトについて	○19世紀初めにシーボルトが来日し、オランダ医学のみではなく、物理・化学・政治形態・西洋思想なども伝えたことを理解し、弟子たちがそれをどのように受け止めたかを当時の状況などから考える。	資料「鳴滝塾図」

展開	○幕藩体制と蘭学（洋学）について ○西洋医学の定着と蘭学（洋学）の発展 ○蘭学（洋学）の発展の影響について	○江戸時代の封建社会の厳重な身分制について知り、その中でも最新の学問（技術・医学・語学など）を学んだ人が幕府や諸藩に登用されたことを知る。 ○「シーボルト事件」や「蛮社の獄」で幕府が蘭学の存在を危険視するようになった背景を考える。 ○幕府は西洋医学の優秀さを認め以下のことを実施し、西洋医学が主流となっていったことを理解する。 ①14代将軍徳川家定の死の直前に蘭方医の伊東玄朴が奥医師に就任したこと。 ②種痘所（後の西洋医学所）の開設。 ○アヘン戦争やペリー来航の結果、諸藩に蘭学塾（洋学塾）が設立され、蘭語だけではなく英語・仏語・兵学も学ばれ、その結果、反射炉や工場も作られた。また民間でも蘭学塾（洋学塾）が各地につくられたことを知る。 ○蘭学（洋学）を学んだ人々により欧米の国家の仕組みが伝えられ、これが薩摩藩や長州藩の倒幕運動の一因となったことを知り、その理由を考える。	資料「シーボルト事件」、「蛮社の獄」 種痘についての瓦版 資料「洋学塾の分布図」 『福翁自伝』
まとめ	○蘭学（洋学）と近代国家への道	○幕藩体制の中で西洋医学がどのように定着してったかを理解する。 ○蘭学の基礎の上により積極的に西洋文化を取り入れ、幕藩体制の矛盾を感じた人々が倒幕や、近代国家の形成に大きな役割を果たしたことを理解し、文化の受容がもつ意味について考える。 ○他の文化を受容する上で大切なことは何であるかを話し合う。	

(4) **評価の観点**　①西洋医学の伝来と普及の過程が理解できたか。②蘭学（洋学）の果たした歴史的役割を理解することを通して、文化の受容のもつ意味を考えることができたか。③蘭学（洋学）の普及が、倒幕運動推進の一因となっていたことを理解できたか。④新しい文化を受容する際に必要な姿勢について考えることができたか。

(5) **指導上の留意点**　①難解な資料に対しては現代語訳した資料を提示する。②資料の読み取りは内容を理解しやすいようにわかりやすい解説を加える。③授業ではプリントを用いて作業学習をさせる。④明治維新後はオランダ医学の根本がドイツ医学であることが判明し、日本の医学はドイツに傾いたことを指摘し、事後の学習につなげる。

2．原子爆弾を生んだ科学者たちの反核運動への取り組み

(1) **教材として取り上げた理由**　核兵器は核分裂反応を利用したものであり、20世紀に入っての急速な科学技術の進歩の中で誕生し、人類の生存に関わる脅威を生んだ。最初の原子爆弾の作成は、ナチスドイツの核兵器開発への危惧から、自らも原子爆弾を開発し、抑止兵器としての役割を担わせようとしたドイツなどからの亡命科学者のアメリカ大統領への提言から始まった。原爆開発は、戦時という特殊状況下で経済性を無視し政府資金による国家的事業として開発が進められ、その成果が科学者の手にではなく政府や軍部の手に渡ったことで科学者の苦悩が生まれた。一部の科学者は自分たちの科学における研究の結果がもらした社会的影響に対して、責任を担おうと尽力し、その成果は国際的な反核・平和運動に結実した。核兵器の開発や反核運動の背景を考察することにより、現代社会の課題の一つである核の問題に対する認識を深め、世界平和のためにとるべき姿勢を育成することを目的として本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は2時間構成の第1時限にあたる。本時では、巨大な破壊力をもち現在も世界の各地に拡散する原子爆弾の開発のきっかけとその推移を理解させる。そして原爆開発に携わった科学者が戦後の核軍拡を危惧し原爆の対日使用への反対を強硬に提言したこと、また戦後は東西冷戦下で国際的な反核・平和運動に尽力したことを理解させ、世界平和のために必要な姿勢や取り組みについて考えさせる。第2時限では冷戦の終結と軍縮・核管理への歩みを扱う。学習指導要領での関連分野は、「世界史A」の「(4)現代世界と日本」の「カ　二つの世界大戦と平和」、「世界史B」の「(7)現代の課題」の「ア　国際対立と国際協調」である。

(3) **展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○原爆がもつ巨大な破壊力の確認	○広島・長崎の被爆状況の凄惨さから原爆の巨大な破壊力と、日本が唯一の被爆国である事実を再確認する。	VTR「核の時代①原水爆の登場」
	○現在も継続する核兵器の開発と拡散	○最近のインド・パキスタンの核実験と民衆の反応を通じて、核兵器が大国の象徴とされる現実と、核抑止力に対する期待が存在する現実を理解する。	VTR「印パ核実験後の両国民の反応」
展開	○原爆開発のきっかけ	○独の科学者による核分裂の発見をきっかけに反ファシズムの亡命科学者たちに危機感が生まれ、独が開発する原爆への自衛手段・抑止効果としての原爆開発の必要性が彼らから米大統領に熱心に説かれ、米国を原爆開発へ取り組ませたことを理解する。	年表「原爆開発の歴史」 資料「アインシュタインの手紙1939.10」
	○原爆開発の経緯	○原爆開発は巨額の資金と大量の人員を必要としたため、次第に米政府・軍部主導下で進められた点を資料・年表で確認する。	資料「ロスアラモス研究所」 VTR「核の時

展開	○亡命科学者たちを中心とした原爆の対日使用に対する抵抗	○原爆開発が政府・軍部主導に移ったことがどのような意味を持つのかを考える。 ○当初の目的と異なり、独の降伏後も原爆の開発は続いたこと、日本への投下も決定され、ついに米は史上初の原爆実験に成功したこと、このような動きに対して原爆開発のきっかけをつくった亡命科学者を中心とした科学者の抵抗があったことを理解する。 ○原爆の日本への投下決定理由は戦争の早期終結のためとされているが、別にソ連の東アジア進出阻止の目的があったこと、また亡命科学者たちが戦後の無制限な核軍拡競争を予言していたことを資料から理解する。 ○原爆の対日使用の意味について考える。	代①原水爆の登場」 資料「ボーアの進言」、「アインシュタインの手紙1945.3」 資料「フランクリポート」、「クリントン研究施設の科学者の署名入り嘆願書」 資料「大統領教書1945.10」「トルーマンの日記」
まとめ	○大戦後の科学者達の平和運動への取り組みと反核運動の広がり	○原爆開発に関わった科学者のなかには戦後の核兵器国際管理に期待を寄せた者もいたが、冷戦が進行し国際政治に期待はできないとみて世界に直接核戦争の危険を警告するようになった。この経緯と、国際的な反核・平和運動への結実をワークシートでまとめ、贖罪を負った科学者たちが核の脅威を訴え、核兵器の管理に尽力したことを理解する。 ○現在も存在する核兵器に関する問題にどのような取り組み・姿勢が必要なのかを話し合う。	ワークシート 資料「ラッセル、アインシュタイン宣言」

(4) **評価の観点**　①独の原爆開発に対する危惧から、自衛手段・抑止効果として反ファシズムの亡命科学者より核分裂を兵器として用いる事が米大統領に提言され、米での原爆開発が始まったことが理解できたか。②原爆開発が国家的事業として進められた結果、原爆開発を提言した亡命科学者の主旨とは異なり、米国の国益を優先した形で原爆の対日使用が決定したことが理解できたか。③戦中から戦後にかけて、科学者たちが自分たちの研究が生み出した核兵器の管理に尽力したこと、そしてこれが国際的な反核・平和運動に結実したことを理解することができたか。④核の問題に対する認識を深め、世界平和の実現にむけて取るべき態度について考えることができたか。

(5) **指導上の留意点**　①ＶＴＲ・年表・写真・資料などを活用し、原爆の巨大な破壊力および、原爆開発の推移と対日使用決定の経緯を実感的に捉えさせるよう配慮する。②ワークシートを用い冷戦下での核軍拡と、科学者を中心とした反核・平和運動の展開を整理する。

3．ペットボトルから見るゴミ問題

(1) **教材として取り上げた理由**　軽くて丈夫で変質しにくいペットボトルは、その特長を生かして清涼飲料水や調味料の容器など様々なところで使用されており、近年その利用範囲は拡大しつつある。しかし、ビンのようにリサイクルを前提とした流通システムが十分確立されておらず、使い捨てが原則となっているため、大部分はゴミとして捨てられている。ペットボトルはゴミになると、「変質しにくい」という長所がそのまま「腐らないので自然に戻らない」という短所となるため、ゴミの埋立処分場の寿命を縮める要因のひとつとなり、また、誤って焼却処理された場合、適切な条件のもとで燃焼しないと、猛毒のダイオキシンが発生してしまう場合がある。このようなペットボトルをめぐる諸問題が存在するにもかかわらず、高校生のゴミに対する意識は高いとはいえないように感じられる。そこで、生徒たちにペットボトルをめぐる諸問題を認識させ、ペットボトルを捨てる際に分別し、店頭回収などのリサイクルを心がけることやコストがかかってもリサイクルのシステムも確立することが、これらの問題を解決し、地球環境の保全に対しても有効であることを理解させ、身近なところから取り組む姿勢を育成することを目的として本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は3時間構成の第2時限に当たる。第1時限ではゴミが増加している現状と理由を理解させ、ゴミの増加が環境を破壊していることを把握させる。本時では、地球環境の保全は、遠くの砂漠に木を植えに行くなどといった特別な事だけではなく、日常生活の中でゴミを捨てる際に気を配ることでも十分貢献できることを理解させ、そのことを自分なりの手法で表現させることをねらいとする。第3時限では日本や外国のゴミ減量化とリサイクルへの取り組みを把握させる。学習指導要領での関連分野は、「地理Ａ」の「(3)現代社会の課題と国際協力」の「イ　諸地域から見た地球的課題」で、または「地理Ｂ」の「(2)人間と環境」の「オ　世界の環境問題」である。

(3) **展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○様々な用途に使われているペットボトル ○長所と短所がなぜ逆転するのか	○ペットボトルが、軽くて丈夫で変質しにくいという特性と、商品としての優位性を生かして、清涼飲料水や調味料の容器など様々な用途に使われていることを確認する。 ○「ペットボトルはゴミになった途端、長所がそっくりそのまま短所になる」という言葉の意味を考える。	様々なペットボトルを見せる 実際に小さなボトルを飲み干しゴミを作る
	○ペットボトルを焼却処理した場合の問題点	○ペットボトルは、原料が石油であるので火をつければ燃えるが、その場合、適切な条件のもとで燃やさないと、猛毒のダイオキシンなどの有害物質が発生する場合があることを理解する。 ○発生したダイオキシンが国境のない大気に拡散し、	新聞記事「北極のアザラシなどからダイオキシンを

展開		地球全体を汚染しつつあることを理解する。	検出」
	○ペットボトルを埋立処理した場合の問題点	○埋立処理した場合の問題点を、ペットボトルの長所に着目して考える。 （長所である点が、「自然に戻らない」という短所になり、原形のままで永久に地球上に残る。） ○不燃ゴミの増加が、ゴミ埋立処分場の寿命を短くしている要因のひとつであることを理解する。	写真「埋立処分場のペットボトル」 「東京スリム」キャンペーンの紹介
	○ペットボトルのリサイクルシステムの問題点	○ビンのようなリサイクルを前提とした流通システムが不十分であること、その理由のひとつとしてリサイクルのコストや再生品の販売状況などから現状では採算が取れないことが多いことを理解する。	
	○諸外国との比較	○日本のペットボトルのリサイクルは始まったばかりなので回収率も低いが、外国では日本より回収率が高い国もあることを理解する。	資料「世界のペットボトルリサイクル回収率」
	○それでは私たちはどうすればよいのか	○ダイオキシンなどの有害物質を出さないようにするには、ペットボトルを捨てるときにきちんと分別すればよいことを理解する。 ○自分たちの教室のゴミ箱の分別がきちんとできているかどうか調べてみる。 ○ゴミの量を減らすためには、何が必要かを考え、話し合う。 （店頭回収への協力、リサイクルを前提とした流通システムの確立など）。	ＶＴＲ「ペットボトルの店頭回収の様子」
まとめ	○実践していくには ○授業の内容を表現する	○環境保全に対して有効な手段は、個人個人の日々の生活の中での心がけであることを確認する。 ○今日の学んだことや、そのなかで自分がもっとも訴えたいこと、または印象に残ったことなどを漫画や絵、キャッチコピーなどの方法で表現してみる。	適当な用紙を配布し、自由に描かせる。

(4) **評価の観点**　①学んだこと、訴えたいことなどを漫画や絵、キャッチコピーなどを通じて表現することができたか。②ペットボトルをめぐる環境問題に対して、当事者意識をもつ事ができたか。③ペットボトルの長所が、ゴミになった途端に短所になることを理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①地域によって、ペットボトルのゴミ分別上の扱いが異なるので、事前の確認が必要である。②「まとめ」で取り扱う、自分なりの手法で行う表現は生徒の多様な個性を引き出せるように、表現の手段にはこだわらないようにする。また、優秀な作品は校内に掲示して、生徒の励みになるようにする。③授業で使用するＶＴＲは教員自身が撮影、編集したものを使用する。

Ⅱ　経済の発展から派生する問題

1．足尾鉱毒事件は今　～足尾と谷中村はどうなった！～

(1)　**教材として取り上げた理由**　　足尾銅山事件は明治期の急速な近代化の過程で発生した公害問題として有名であるが、その後足尾（銅山）や谷中村（渡良瀬遊水池）がどうなったかについてはあまり知られていない。現実には、鉱毒問題は完全に終わったとは言えず、この２つの地域は鉱毒事件以後も時代や経済情勢の変化の中で大きな影響を受けてきた。足尾銅山は大正期に繁栄の頂点を極めたが、戦後閉山に追い込まれている。栄枯盛衰を乗り越え、足尾は今、新しい地域づくりを模索している。一方、渡良瀬遊水池は土砂が堆積し、戦後は広大な葦原と化していた。そしてこの広大な国有地の再開発を巡っては様々な政策が出され、遊水池は少しずつその姿を変えていった。このように時代や経済情勢の変化が人々の暮らしや環境に与える影響を学ぶうえでも、地域開発の問題を理解するうえでも足尾と谷中村のその後の歴史は適切な題材であると考え、また、この学習を通し、生徒たちが自分たちの住んでいる地域にも関心をもち、地域の歩みに主体的に関わっていこうという意識を育むことを目的として、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は５時間構成の第５時限に当たる。第１時限は繊維産業を中心とした日本の資本主義の成立について、第２、３時限は重工業の発展と財閥の形成及び足尾鉱毒事件について、第４時限は農業・農民の動向及び社会運動の発生について扱う。本時はテーマ学習として足尾鉱毒事件のその後を学ぶ。足尾と渡良瀬遊水池という２つの地域の歴史を対比しつつ、政府・企業・住民・自然の営みを浮かび上がらせ、足尾鉱毒事件が現代に問いかける問題を理解させ、考えさせる。学習指導要領での関連分野は、「日本史Ｂ」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ウ　国際関係の推移と近代産業の発展」である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○戦後の足尾の風景	○1960年頃の足尾（松木村跡及び足尾銅山内部）の映像を見て、戦後の足尾の自然や鉱山の労働環境について考える。	ＶＴＲ『人間の條件』（原作五味川純平）
展開	○大正～昭和前期の足尾銅山 ○戦後の足尾について	○足尾町と渡良瀬遊水池の位置を地図で確認し、足尾鉱毒事件について概略を復習する。 ○大正期～昭和前期の足尾について理解する。 ①大正期における足尾町と古河鉱業の繁栄。 ②鉱山労働者の動向。強制連行問題。 ○戦後の足尾町の歩みについて理解する。 ①自然環境回復のために始まった砂防と緑化の公共事業。効果と投入された税金。 ②1973年の銅山閉山と古河の鉱毒問題への責任の取り方。	地図「関東の河川」 年表「大正から現在までの足尾町」 グラフ「足尾の産銅量と人口推移」 地図「現在の足尾町」

展開	○戦後の渡良瀬遊水池について	③古河鉱業などの海外進出。フィリピン・レイテ島パサール精錬所建設と公害発生。 ④古河の社名変更と事業整理。 ⑤足尾町の過疎化と観光による町おこし。 ⑥ゼネコン各社が合同で提案した地域地開発案「ガイア計画」(松木村跡に廃棄物処理場建設)。 ○戦後の渡良瀬遊水池の歩みについて理解する。 ①自然回復！　鉱毒は埋まり、広大な葦の生い茂る湿原には多くの貴重な動植物が戻ってきた。 ②渡良瀬遊水池再開発を巡る激しい争奪戦。米軍飛行場・貯水池建設・国際空港案・レジャー利用・アクリメーション計画（遊水池のレジャーランド化） ③川と遊水池を守る住民運動と田中正造の遺志を受け継ぐ諸団体。 ○地域開発と第3セクター方式について理解し、話し合う。 ①第3セクター方式である「ガイア計画」と「アクリメーション計画」の概要。 ②住民、地域経済、環境への影響と利権構造。	資料「精錬所前で拾った石」 「足字銭」 「砂防ダムのペーパークラフト」 地図「渡良瀬遊水池」 年表「戦後の渡良瀬遊水池」 地図「アクリメーション計画図」
まとめ	○終わっていない足尾鉱毒事件と私たちの生き方	○足尾鉱毒事件は終わっていないことを確認する。 ①足尾町に今も残る鉱山の堆積場の危険性。 ②再開発による渡良瀬遊水池の鉱毒の流出問題。 ③日本企業の海外進出をめぐる問題。 ④東京の水道水と渡良瀬貯水池の関係。 ⑤遊水池再開発を巡る問題点。 ○学習内容をふまえ、私たちの生活は何かの犠牲の上に成り立っていないか。地域に意味のない開発や公共事業は行われていないか。利潤追求の現実の中で私たちはどう生きるべきかを話し合う。	資料「一杯の水道水」

(4)　**評価の観点**　①鉱毒問題はまだ解決しておらず、新たな問題を起こし続けていることが理解できたか。②経済の発達や情勢の変化の中で翻弄された2つの地域の課題を理解できたか。③生徒たちが地域開発や公共事業などに関心をもち、自分たちの生き方と関連づけて話し合ったか。

(5)　**指導上の留意点**　①映像や銅銭、渡良瀬川の石、水道水など具体的事物を効果的なタイミングで使い、生徒を飽きさせず、興味や関心を高める。②先に学んだ足尾銅山事件と関連づけて内容を深める。そのとき使用したプリントも再利用する。

2.「南北問題」と開発援助

(1) **教材として取り上げた理由**　戦後の国際社会が抱えている「南北問題」は、様々な分野の地球的課題に深刻な影響を与えている。経済、政治、環境などのマクロ的な事象にとどまらず、就業や個人の幸福追求の権利、子どもや女性の諸権利など、人権といったミクロ的な側面においてもそれぞれの課題解決の妨げとなっている。つまり、現代の先進諸国と発展途上国との間には、修復の難しい較差がしっかり根を下ろしていると考えられる。地球という限られた空間で同じ時間を共有している、本来「平等」であるはずの人間が、生まれた国家や地域によって、人生そのものに大きな較差を抱えて生きていかねばならない。これは人類の生存に関わる根幹的な課題であると言える。様々な情報や物品が氾濫し、表面的には「豊かな」社会に生きる日本の高校生に、時には生命の維持すら厳しい生活を強いられている地域の現状を認識させ、国際社会が実行している「南北問題」の解決を目的とした「開発援助」についての基本的な理解を与え、日本という国家や個々の日本人が今後どのような行動をとるべきか、生徒自身に考えさせることをねらいとして本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は3時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、先進国と発展途上国との経済的な較差から発生する諸問題の事例を複数取り上げる。本時では、国際社会が「南北問題」の解決のために採用する方策の事例を紹介し、先進諸国を中心とした政府援助のあり方について学習する。第3時限では、日本の政府援助の現状と問題点について前時限の内容よりも具体的な事例をあげ、今後の国際援助について考察させる。なお、学習指導要領での関連分野は、「地理A」の「(3)現代世界の課題と国際協力」の「ウ　地球的課題への国際協力と日本」や、「地理B」の「(4)世界と日本」の「ウ　国際化の進展と日本」である。

(3) **展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○発展途上国における様々な「貧困」	○内戦や飢餓など様々な貧困に苦しむ地域での人々の暮らしについて、自己の日常生活を比較して、南北問題を理解する ○写真資料での国家の位置を地図帳で確認する。	写真資料「各国の暮らし」
展開	○貧困の定義	○人間のもつ欲求は個人差や社会集団差、地域差などがあることから、絶対的な「貧困」の定義は難しいことを知ったうえで、一例として「貧困ライン」(世界銀行)の考え方を理解する。	板書「貧困ライン」
	○途上国援助	○資料などから、発展途上国への援助にはどのような方法が現在実施されているかを理解する。	資料「主要援助国のＯＤＡ分野別比較」
	○先進諸国による開発援助	○資料をもとに、発展途上国に対する開発援助（ＯＤＡ）の実態を整理し、あわせて、円借款の対象分	板書「日本のＯＤＡの現状」

展開	○開発援助の方法論	野が経済インフラに偏っていることや、無償資金協力などの実態がタイド（ひもつき）援助であると指摘されている日本のＯＤＡの現状についても理解する。 ○日本やその他先進諸国のＯＤＡが実際にどのようなかたちで融資・提供されているのかを、ブラジルのカラジャス鉄鉱業への融資やインドのナルマダ＝ダム計画を通して理解する。 ○文献資料の国家や地域を地図帳で確認する。 ○先進諸国が実施する開発援助には３つのアプローチが考えられてきたことを理解する。また、開発援助の各アプローチが実際に活用されている発展途上国の事例も理解する。	資料「大カラジャス計画」 「ナルマダ＝ダム計画」 地図帳 板書「開発援助のアプローチ」
まとめ	○日本の開発援助の問題点 ○国家単位の開発援助のあり方 ○ＮＧＯの活動と発展途上諸国援助の基本姿勢	○ＯＤＡに関する建設的な議論が日本国内で発展しない理由として、政治的側面やＯＤＡに対する国民の認識不足などを通して理解するとともに、日本が行っているＯＤＡの問題点を理解する。 ○多数の発展か、少数の権利保護かの議論が続くなかで、経済インフラへの建設援助が中心となっている日本のＯＤＡへの批判論と肯定論をもとに、「南北問題」の解決のために何が必要であるのかを考える。 ○「南北問題」解決のために、個々の日本人レベルではどのような方法論と行動をとっていくべきか、また開発援助の本質について、ＮＧＯの活動実践を参考にして話し合う。	資料「日本のＯＤＡのおもな供与国とその供与額」 新聞「ＯＤＡ不正事件」 板書「大型開発援助への批判と肯定」 資料「サヘルの会」

(4) **評価の観点**　①「南北問題」における先進諸国と発展途上国との経済的な較差が認識できたか。②大型開発計画を中心とする政府援助と、「貧困層」の日常生活の向上を重視する政府援助について、それぞれの問題点が理解できたか。③開発援助の本質やその在り方について考える場となり得たか。

(5) **指導上の留意点**　①参考文献からの引用は、生徒自身で問題意識が形成されるような内容を精選する。②教材で取り上げた地域は地図帳を用いて確認させ、地理学習に必要な位置や距離関係を把握させる。③現在ＮＧＯが果たしている役割についても触れ、次の時限への学習につなげる。④英語などの専門的な略語は可能な限り略語の元の表記も紹介する。

3．国境を越えた労働力移動　　ー外国で働くこととはー

(1) **教材として取り上げた理由**　国際経済の発展とグローバル化の進行は、多くの人々が自国を離れ他国で働くことを促進した。現在このような国境を越えた労働力移動は、モノ（製品）やカネ（資本）の移動とともに、よりダイナミックかつ複雑な動きをみせている。しかしながら、こうした労働力移動の増加は、移動先の国々で民族対立や人権問題等の深刻な社会問題を生じさせてきた。我が国でも、1980年代以降に多くの外国人労働者が来日したことによって、新たな地域問題や社会問題が発生している。その一方で、日本企業の海外進出の増加や、若者の海外就職志向の拡大により、これまで国内で生活してきた人々が外国人労働者として異国の社会で生活し、現地の社会問題に直面する機会も増加している。　そこで、こうした国境を越えた労働力移動によって生じる問題について、日本にきた外国人労働者がもたらした社会問題という視点で考察することに加え、生徒自らが「外国人労働者として外国へ行って働く」という前提にたって考察させる。これによって経済のグローバル化から生じた今日の課題に対し、より主体的に解決していく資質を育成することをねらいとして本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は5時間構成の第4時限にあたる。第1時限では、日本における外国人労働者問題を、第2時限では、世界の労働力移動の歴史や要因、問題点を扱い、主として二国間の経済格差の拡大によって労働力移動が生じ、それによって様々な社会問題が引き起こされていることを理解させる。第3時限では、日本から外国への労働力移動の歴史と現状について扱い、世界の労働力移動との相違点を理解させる。本時では、海外就職希望者の人気が高く在留邦人の一番多いアメリカ合衆国で働く計画を立てさせる中で、日本に住む者が外国で働くことの意義や問題点、働くために必要な資質について考察する。第5時限では、異文化社会の中で外国人として働くことの難しさについて理解させ、最後にこれまでの授業をふまえて、外国で働く自分の姿と外国人労働者に対する感想を作文にまとめさせる。学習指導要領での関連分野は、「地理A」の「(2)世界のさまざまな人々の生活・文化と交流」の「ウ　諸地域の人々の交流と日本の課題」である。

(3) **展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○アメリカ合衆国で働く日本人	○アメリカ大リーグで活躍している日本人選手の記事を読み、なぜ彼らはアメリカ合衆国で野球をやることを選択したのかを考える。	新聞記事
		○アメリカ合衆国で働く人の体験記を読み、アメリカで働くことの意義について考える。	資料「アメリカで働く人々」
		○外国で働く日本人の中で、アメリカ合衆国で働く人の数が一番多いことを理解する。	資料「海外で働く日本人数」
	○アメリカ合	○自分がアメリカ合衆国で働くと想定した場合、ど	ワークシート

	衆国で働く自分	んな目標を持ち、どのような仕事に就きたいか、自らの考えをまとめ、発表する。	
展開	○アメリカ合衆国で働くための計画	○資料や書籍等からアメリカ合衆国で働くための方法や必要な事項を理解し、自分の計画づくりを具体化する。そのために特に次の点について理解する。 ①労働ビザ（査証）とビザ発給までの過程 ②外国で働くための方法 ・現地就職先を探した後、労働ビザの取得 ・留学後、就職先を探し、労働ビザの取得 ・インターンシップ制度の利用 ・ワーキングホリデー制度の利用 ③日系新聞や邦人紙、インターネット等を利用した現地就職先を探す方法や、就職先決定までの過程	ワークシート 資料「アメリカのビザ一覧表 資料「アメリカで働くためのフローチャート」「人それぞれのキャリア」 資料「邦人紙上の求人広告」 「インターネットの求人広告」
	○アメリカ合衆国で働くことの難しさ	○失敗例の報告から、多くの人々がアメリカ合衆国で働くことに挫折したり失敗したりしていることを理解し、その原因について考える。 ○働く人自身の姿勢の甘さや日本とアメリカ合衆国との社会の違いがあることを理解する。 ○現地の人材斡旋会社社員のインタビュー記事からどのような日本人が仕事で成功したり失敗したりするかを理解する。	ワークシート 資料「アメリカでの失敗例」 資料「斡旋会社Q＆A」
まとめ	○外国で働く意義と必要なこと	○自分がこれから外国で働くために必要だと考える事項をまとめる。 ○外国で働くことの意義と難しさについて考え、自分の意見をまとめる。	ワークシート

(4) **評価の観点**　①外国で働く方法を理解できたか。②外国で働くことの意義や難しさについて考えることができたか。③外国で働くために必要な事項を自分の視点で考え、働くことに対する考え方を深めることができたか。

(5) **指導上の留意点**　①生徒が「外国（アメリカ合衆国）で働くこと」を自分の問題として考える姿勢を引き出す配慮をする。②地図帳を利用し、地名の確認に心掛ける。③資料が多いため、提示の際にはその精選を心掛け、分かりやすい資料提示を行う。④体験者や体験をまとめた書物の活用による体験的な学習の工夫を行うことに留意する。

4．王安石の財政改革と宋代の国際関係

(1) **教材としてとりあげた理由**　第二次世界大戦後の日本は歴史上まれに見る経済発展を遂げ世界有数の経済大国となった。しかし、バブル経済が崩壊した1990年以降現在に至るまで経済の低迷が続き、政府は様々な政策を行っているものの効果は芳しくない状況にある。

財政改革は歴史上様々な形で行われており、その背景や内容、影響を学習することは、現代に生きる高校生にとっても重要なことである。ここでは、中国の宋代に行われた「王安石の改革」を取り上げた。「王安石の改革」が、国家財政の安定と経済の活性化という二つの課題の解決を目的とした点などについて、当時の政治状況や周辺諸国との軍事的緊張関係など当時の国際状況を踏まえながら考察させることを通して、財政改革についての理解を深めさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は4時間構成の第3時限目に当たる。第1時限目では唐末・五代の社会の混乱と経済の発展を、第2時限目では宋の成立と北宋の内政、外交についてを扱う。本時では王安石の改革を宋代の経済の発展と社会の変化を背景として考察させ、東アジア社会の発展という流れの中でその歴史的意義を理解させることを目的とする。第4時限目では周辺諸国の台頭と北宋の滅亡について学び、次項の「モンゴル民族の発展」に展開していく。学習指導要領での関連分野は、「世界史B」の「(2)東アジア文化圏の形成と発展」の「イ中国社会の変遷と隣接諸民族の活動」である。

(3) **展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○日本と世界の経済危機	○長引く不況、高校卒業者の就職難など身近な問題から、現代の経済危機の状況、特に財政改革と景気回復の両立が課題であることを理解する。 ○歴史上の諸改革で知っているものをあげ、歴史上、財政改革が何度も行われたこと、その中で現在の課題である財政改革と景気回復の両方に取り組んだ人物がいたことを理解する。	資料「新聞記事」（今年度高卒者の就職率、商品券の導入赤字国債の残高等）
展開	○改革の背景 ○改革が必要	○前時の復習として、中唐以降、大土地所有制が発展したことを確認する。 ○宋代の中国は、表面的には支配領域が狭いが、実際は経済が非常に発展した時代であったことを理解する。 ○経済大国でありながら軍事小国であった北宋の国際的地位を理解する。 ○改革が必要となった理由を考える。その際、財政	具体的な数字の入った図表 王安石の肖像 開封の市場の絵など 資料「水滸伝」（漫画）

展 開	になった理由 ○改革の内容と成果 ○改革の限界	的要因として、官僚の増加・軍事費の膨脹などによる支出の増加、税負担の不均衡（自営農民の負担増）に、対外的要因として、異民族からの圧力に着目する。 ○青苗法が地主層の反発を招いた理由、市易法が大商人の独占を排除する試みであったことを理解する。特に産業の停滞の打開策として中小商人の保護を図った点に着目する。 ○王安石の改革が一定の成果をあげたことを理解する。 ○新法党と旧法党の政争が政治の混乱をもたらしていったことを理解する。 ○改革の推進が「皇帝との個人的な結びつき」という極めて不安定な要因によって左右された点に着目し、宋代の政治構造を理解することを通して改革の限界について考える。	資料「青苗法・市易法」（簡単な現代語に訳したもの。 図表 年表
まとめ	○王安石の改革の意義 ○財政改革を成功させるためには	○王安石の「国民の負担を増加させず、経済の活性化と公平な課税によって財政を立て直す。」という主張について話し合う。 ○王安石の改革の評価を行い、挫折した原因について考える。 ○財政改革を成功させるための要因について考え、その上で現在日本で行われている財政改革の課題と方策について自分なりの考えをまとめる。	まとめのアンケート

(4) **評価の観点**　①中国社会の発展と変化について理解できたか。②「王安石の改革」の背景と内容の概略について理解できたか。③改革が挫折した理由について考えることができたか。④財政改革について自分なりの意見をもてたか。

(5) **指導上の留意点**　①学習の手がかりとして、現代社会との対比を行うが、今日的な視野からの一方的に批判することや、逆に現代との類似性をこじつけ、強調することを避ける。②単調な事実の説明を避けるために図表等を活用し、生徒が理解しやすいように留意する。③授業全般を通して「王安石の改革」を「党争」の原因ととらえ、否定的な評価をすることや、逆に「先駆的な改革者」として評価するあまり、旧法党を一方的に批判することのないよう留意する。④現在の財政改革については、概略を説明するだけにとどめ深入りしないよう配慮する。

Ⅲ　人と文化の接触・交流・共生

1．岩瀬忠震と日米修好通商条約

(1)　**教材として取り上げた理由**　　ペリー来航から、日米修好通商条約を含むいわゆる安政の五カ国条約の締結に至るまでの5年間は、近代日本の形成に重要な時期である。これ以降日本は、近代国際社会との関わりを深めていくことになる。諸外国との条約締結に際して中心的な役割を果たした一人が岩瀬忠震である。彼は、江戸時代末期の幕臣であり、開国に積極的な姿勢を示した。ハリスとの条約交渉に携わり、日米修好通商条約勅許獲得のために奔走した後、大老井伊直弼の命で、勅許を待たずして条約に調印した。次いで外国奉行として蘭・露・英・仏との条約に調印するなど、日本の開国に重要な役割を果たした人物である。このように、国際社会の中で、自らの考えに基づいて行動した人物を取り上げることは、生徒の興味・関心を引き出すことのみならず、自ら考え行動できる資質の育成にとって重要である。岩瀬が開国に対してどのような考えを持ち、行動していったかを学ぶことにより、幕末の状況により深い理解を得、また国際社会において自ら考える姿勢を培うことをねらいとして本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　　本時は、4時間構成の第3時限にあたる。第1時限では、開国前夜の状況と列強のアジア進出、ペリーの来航と日米和親条約の締結を、第2時限では、安政期の幕政改革と日米修好通商条約の締結を扱う。本時では、開国に関する岩瀬忠震の考え方を横浜の開港に焦点を当てて学び、外交あるいは他者との交流において必要なことは何か、について考えさせる。続く第4時限では、貿易の開始とその影響を取り上げる。学習指導要領の関連分野は「日本史A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「ア　欧米文化の導入と明治維新」、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ア　欧米文化の導入と明治維新」である。特に「3内容の取扱い」の(4)のアの「(イ)歴史上の人物について、その果たした役割や生き方などを時代的背景や地域の特性との関連において学習できる」主題学習として、開国前後の時期の理解を深めることを目的とする。

(3)　**展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○江戸で撮影された最古の写真 ○日米間で締結された2つの条約	○江戸で撮影された、最も古い写真に関する新聞記事を見て、写真中に岩瀬忠震が写っていることを知る。 ○日米和親条約と日米修好通商条約を比較し、両条約における開港場の違い、特に下田閉鎖の後、神奈川（実際には横浜）の開港が決められたことを確認する。	資料「朝日新聞」 史料「日米和親条約」「日米修好通商条約」
	○岩瀬忠震について	○岩瀬忠震の生い立ちや活躍した時期、略歴を知る。特に朱子学を深く学び俊才と称されたこと、外交に関する訓練などは受けていないことや、安政の大獄	資料「略年譜」

展開		により謹慎を命ぜられたことなども年譜から確認する。 ○岩瀬が、条約交渉の全権としてハリスと直接交渉に当たり、日米修好通商条約を含む、いわゆる安政の五カ国条約に調印したことを知る。	
	○横浜開港の経緯	○開港場について、幕閣・ハリス及び岩瀬それぞれの考え方を比較し、それぞれの開港に対する考え方の背景を考える。特に岩瀬が貿易を幕府の経済体制との関わりの中でとらえていたこと、そのために横浜開港を良策と考え提言していたことに注目する。	資料「岩瀬の上申書」「開港場に関する考え方の比較」
	○条約交渉の実際	○ハリスとの間で行われた条約交渉のひとこまを実際に演じてみる。当時、日本側がいかに国際上の慣習や自由貿易の仕組みについて無知であったかを知る。(国際法や貿易について簡単に確認する。)	資料「ハリスとの交渉の様子」
	○封建官僚層の限界	○前時の内容を確認し、交渉の様子から不平等条結締結に至った背景について考える。特に、自由貿易についての認識がないため、関税について深い議論がなされなかったことなどに注目し、このことが明治時代の条約改正交渉の大きな課題となったことを理解する。 ○学習内容を踏まえ、外交交渉の場において必要な要素は何か、他者との交流の中で重要なことは何かについて話し合う。	
まとめ	○開港後の貿易	○開国後、横浜が日本最大の貿易港となることを知り、岩瀬が横浜開港を進言したことの先見性を確認する。 ○調印後、安政の大獄で謹慎を命ぜられ、その後わずか2年で死去した岩瀬の心情がどのようなものであったかを想像する。	資料「開港後の輸出入額」 資料「エルギン卿遣日使節録」

(4) **評価の観点**　①岩瀬忠震の開国に関する考え方、特にその広い視野に裏打ちされた先進性と、国際社会に対する無知からくる限界を理解できたか。②日米修好通商条約に不平等な条項が盛り込まれることとなった要因を考えることができたか。③開国後の貿易の状況についての知識を得られたか。④対外交渉や他者との交流の中で重要なことについて考えることができたか。

(5) **指導上の留意点**　①難解な史料については、現代語訳したものを準備し、取り上げる箇所を精選するなどの配慮をする。②岩瀬個人の顕彰に終わらないように注意し、人物を通して歴史の全体像を理解させるように努める。

2．大正デモクラシーが生み出したもの　ー「人間に光あれ」叫びは続くー

(1) **教材として取り上げた理由**　大正時代は、明治維新以来の急速な近代化が一段落し、近代化の過程の中で起こった様々な問題を振り返ると同時に、次の時代への新たな流れを生み出した時代である。その中で、大正デモクラシーの風潮が生まれ、民衆の力を基礎とする様々な運動によって、政治や社会、文化等の各方面で民主主義的傾向が強まったことが、今日の民主主義の源流となったといえる。また、この時代は様々な労働問題、社会問題、文化の大衆化など現代日本社会と共通する点も数多い。

国際化が進む現在、異質性（異文化・違うこと）を柔軟に受容する態度が、私たちに強く求められている。一方、学校のみならず職場でも「いじめ」が問題となっていることにみられるように、同一性、均質性が高い日本社会においては、様々な差別・人権問題が未だ解決されてはいない状況にある。現代社会の課題解決のためには、民主主義における人権・自由・平等と、その根底にある「個の確立」を問い直すことが必要である。大正デモクラシーの学習を通して、なぜこの時代に民主主義的傾向が強まったのか、またそれはどのように追求されていったのかを、社会全体の動向と関連づけて理解し、現代社会に共通する様々な問題を考えることで、現代の課題についても具体的実践により解決していこうとする力・態度を養うことをねらいとしてこの教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は5時間構成の第5時限にあたる。第1時限では第1次世界大戦と資本主義の発展を、第2時限では米騒動と大正デモクラシーを、第3時限では普通選挙法と治安維持法の成立を、第4時限では大衆文化の発展を、それぞれ扱う。本時は、テーマ学習として、水平社宣言を中心に、大正デモクラシーを背景に前進した様々な労働運動、社会運動に共通する、人間の尊厳性・権利・自由の精神と具体的な実践を重視する態度を考察し、さらにその後の部落解放運動を概観することで、より良い社会を創造するために必要な市民の在り方を学ぶことをねらいとする。学習指導要領での関連分野は「日本史B」の「(6)両世界大戦と日本」の「イ　政党政治の発展と大衆文化の形成」である。

(3) **展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○大正デモクラシーの社会背景	○ノンキ節の歌詞から、資本主義の発展と民衆の生活、当時の政治の状況について確認する。	資料「ノンキ節」 図「添田唖蝉坊」
	○友愛会の主張と官営八幡製鉄所の労働者の要求書	○友愛会関西同盟会の創立宣言で団結権・団体交渉権・争議権を要求したことを知る。 ○官営八幡製鉄所の労働者が生活に関わる基本的な待遇の改善を、具体的に要求したことを知る。 ○図版から、当時の労働争議の様子を知る。	資料「労働者は要求する」 図「労働争議」

展開	○社会・労働動の展開 ○水平社を作った人々 ○水平社宣言の精神 ○その後の部落解放運動	○大正デモクラシーの高まりと社会運動の展開について整理し、全国水平社の結成が、民主主義を求める社会的潮流の中で行われたことを把握する。 ○図（写真）を見ながら、水平社創立の中心となった人々が当時無名の青年たちであったこと、宣言が感動をもって人々に迎えられたこと、初期の水平社運動が農民運動とも結びついていたことを知る。 ○「勦（いたわ）る」の語に注目し、「勦（いたわ）る」ことは人間の尊さを辱めること、真の差別解消の実現のためには、互いに尊敬し、支え合うことが必要であるとした、水平社宣言の人間の尊厳性重視の精神を考察する。 ○「人間が神に変わる」とは、主権意識の現われであることを考察する。 ○水平社宣言の精神で重要なことは何か考察する。 ○その後の部落解放運動の展開を、一人の女性の体験談から概観し、運動が多くの無名の市民によって進められたことを知る。 ○戦後の解放へ向けた取り組みが人権問題全般へと広がりをみせていることを知る。	ワークシート 教科書 図「水平社を作った人々」 資料「水平社宣言」 ワークシート 資料「住吉のおかん」 ワークシート
まとめ	○現代社会に対する認識 ○水平社宣言から学ぶこと ○身近な取り組み	○現代社会に共通する諸問題（第2時限でまとめておく）を再確認する。 ○「差別はなくなったか」について話し合う。 ○近年の市民運動（市民オンブズマンや住民投票など）をヒントに、水平社宣言の精神から学ぶべきことは何か、まとめる。 ○高校の生徒会活動などの例から、高校生でも取り組める身近な問題がないか、考える。	 資料「住民投票」 資料「高校生徒会の取組み」

(4) **評価の観点**　①社会運動、労働運動と社会背景との関連性を把握できたか。②水平社宣言が自立を目指した自主的な運動を提起し、人間の尊厳性を重視したことを理解できたか。③自ら行動し、身近な問題を解決しようとすることが、民主主義を確立する上で重要であることを理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①提示する資料の内容を精選し、難解なものは平易に現代語訳する。②難解な語句はなるべく使わない。③図、資料は実物投映機でモニターを通して提示する。④導入と展開の「その後の部落解放運動」は事実を確認する程度にとどめる。⑤民主主義確立の取り組みを生徒の生活と結び付けて考えさせ、共感の持てる題材となるよう留意する。

3．新しいパートナーシップを求めて　ー世界と日本の先住民族ー

(1)　**教材として取り上げた理由**　国際理解に努めることは、国際社会に生きる人間として必要不可欠なことである。国際理解を進める上で大切なことは、人間がそれぞれ違った存在であることと人間が持っている個々のアイデンティティーをお互いが認め合い、その違いを尊重し合うことである。歴史上で、コロンブスによるアメリカ大陸の発見に象徴されるヨーロッパ世界の拡大は民族を大きく「文明」と「未開」に独断と偏見で分け、一方的に「未開」な民族と決めつけられ征服・侵略・殺戮されてきた先住民族は現在も厳しい人権の抑圧にさらされている。国際化の進む中で、お互いの立場の違いや価値観を認め合おうとする人権教育を推進する観点から、日本のアイヌ民族問題と1992年ノーベル平和賞を受賞したグアテマラの先住民族人権擁護活動家リゴベルタ＝メンチュウの活動を通して、国際社会における多民族・多文化社会の在り方について考察を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2)　**本時のねらい**　本時は3時間構成の第3時限に当たる。第1時限では世界の先住民族を、第2時限では日本の先住民族アイヌを取り上げる。本時では、リゴベルタ＝メンチュウの活動を通してグアテマラの先住民族問題を理解させるとともに、真の国際理解とは何かを考察させる。学習指導要領での関連項目は、「世界史A」の「(4)　現代世界と日本」、「世界史B」では「(7)　現代の課題」であり、またテーマ史として扱うことも可能である。

(3)　**展開例**

	学習項目	学習活動	備考
導入	○リゴベルタ来日とアイヌ ○グアテマラの概要	○1993年9月に来日したリゴベルタの訪日目的とアイヌとの交流を理解する。 ○リゴベルタの故国グアテマラについての概要と先住民族インディヘナについて理解する。 ・グアテマラの事を知っているかの質問に答え、世界地図の中からグアテマラを探す。 ○アイヌもインディヘナも固有の文化と言語を大切にしていることを理解する。 ・アイヌとインディヘナの簡単な言葉を知る。	写真「リゴベルタ」 ＮＧＯの資料グアテマラの地図・写真 インディヘナとアイヌの織物 トウモロコシ、コーヒー、綿花
展開	○リゴベルタのノーベル平和賞の受賞理由 ○先住民族の民主化への歩み	○1992年にリゴベルタ＝メンチュウがノーベル平和賞を受賞したこと、その受賞理由と背景について理解する。 ○グアテマラの先住民族の悲惨な状況とその歴史的背景（差別と虐殺の5百年）を理解する。 ○立ち上がった先住民族の民主化にむけての活動をリコベルタと先住民族の抵抗・闘争を通して理解する。	新聞記事 資料「ラスカサス」 写真

展開	○グアテマラの現状	○グアテマラの現状とこれからの課題について理解する。	
	○先住民族の立場になるシミュレーション	○以下のシミュレーションをすることによって先住民族の立場を理解し、抑圧する側と抑圧される側がどのような感情・態度になるかを体験する。 ・例えば、血液型によるグループ分けを行う。 ・後に誤解を生じさせないため、このシミュレーション何の根拠もないということを丁寧に説明する。 ①クラスを血液型で２つのグループに分ける。 ②Ａ型ＡＢ型のグループの方がＢ型Ｏ型のグループより性格的に優れているとし、前者は後者に対し命令権・決定権を行使できるとする。 ③前者は後者に対して簡単な指示を出し、後者はそれに従う。 ④立場を逆転する。 ⑤抑圧者・被抑圧者の気持ちを体験することにより、差別制度は、差別する側が自らの権力・富を守り、支配しやすいようにつくったものだと認識する。	ワークシート
まとめ	○「新しいパートナーシップ」の実現と先住民族問題および人権問題の克服のために	○グアテマラの先住民族問題を踏まえて1993年国際先住民年のテーマ「新しいパートナーシップ」の意味を理解する。 ○1994年から2004年までの「世界の先住民族の国際10年」におけるリゴベルタとアイヌ民族の問題克服への挑戦とその意義を理解する。 ○これからの問題解決にむけての努力（国際協力、市民からの草の根運動、一人一人の価値観の再考な	資料「世界の先住民族」抜粋 ワークシート

(4) **評価の観点**　①先住民族問題を理解できたか。②先住民族問題を通して地球に住む人間はみな同じ人間としての権利を持っており、その中には自らの民族に固有な文化の中で生きる権利も含まれているということ、また私たちは同じであると同時に異なる存在であるということを理解できたか。③自分にとって人権問題とは何であるか考察できたか。

(5) **指導上の留意点**　先住民族に対して生徒が持っている偏見や情報不足を是正するように努めるとともに、先住民族の文化に対して興味・関心を持たせるよう留意する。

4.「地球市民」の育成をめざして

― クロアチアナイーブアートの体験を通して学ぶ文化と心 ―

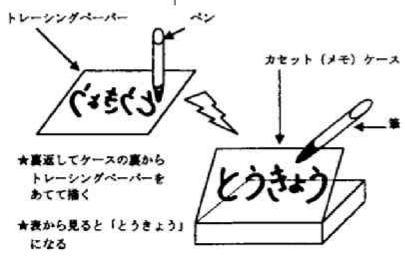
(1) **教材として取り上げた理由**　1998年6月フランスワールドカップの参加国を授業の中で取り上げ、その国の社会、文化、人々の暮らしを学ぶことで、ただ単にサッカーを観戦するだけでなく、深い見方ができないだろうか。そんな意図を持って取り上げた。テストのための「覚えねばならない」知識理解が学習であると考えてきた生徒たちに、生き生きとした体験学習を通して、異なる文化を持つ人々の暮らしに共感を持って深く理解する力を身につけさせたいと考えた。学習を通して将来「自分自身がどう貢献できるのか」を考え、行動することのできる主体的な地球市民となることが大きなねらいである。フランスワールドカップの開催国や対戦国を取り上げたのは、生徒が自分との関わりを認識しやすく、また主体的に取り組みやすいと考えたためである。体験学習を柱に地理A（2単位）10時間、一つの国について2時間構成とし、残り2時間をまとめにあてた。

(2) **本時のねらい**　本時は10時間構成の第5・6時限にあたる。第1・2時限では、フランスの食文化について調理実習、第3・4時限では、アルゼンチンの文化・生活について留学生を交えた国際交流によって理解を深める。本時では、クロアチアの伝統芸能の一つであるナイーブアートを体験する。異文化を体験することでクロアチアに興味・関心をもたせ、旧ユーゴスラビアから分離独立した新しい小国を、身近な存在に感じさせることを目的とした。

クロアチアのある一人の画家が戦争によって家族を失い、心に傷を負い、立ち直ってきた姿に学ぶ。同じ地球に暮らす人間として、戦争の悲惨さを理解すると共に、将来、地球市民の一員として国際社会に貢献できることはないか考えさせる。様々な言語、民族、宗教が渦巻き、ヨーロッパの火薬庫といわれたバルカン半島であるが、複雑な民族社会の中でも人々の心の暖かさは世界共通であることに気づかせる。学習指導要領での関連分野は、「地理A」の「(2)世界の人々の生活・文化と交流」の「イ　諸民族の生活・文化と地域性」「ウ　諸地域の人々の交流と日本の課題」または、「地理B」の「(2)人間と環境」の「ア　人種・民族と国家」である。

(3) **展開例**　（2時間続きの指導案であるが、1時間ごとの授業も可能である。）

	学習項目	学習活動	備考
導入	○クロアチアの文化に触れて興味・関心をもつ	○クロアチア大使館のホームページを見てワールドカップ対戦国に関心をもつ。 ○簡単なクロアチア語（あいさつ）を知る。 ○クロアチアの国旗の意味を知る。	パソコン 資料「クロアチア語」 国旗
展開	○クロアチアの人種・民族に触れる ○クロアチアの人々の暮らし、文化、風	○クロアチアとフランスの試合開始のＶＴＲを見てクロアチアの人種・民族構成を確認する。 ○旧ユーゴスラビアの地図を確認する。 ○ＶＴＲを視聴する。 一人の芸術家が戦争で家族や友人を亡くして、絵に色が描けなくなったことや、ホームステイするレポー	ＶＴＲ「ワールドカップ」 ＶＴＲ「世界ウルルン滞在記」とワークシート、新

展 開	習、社会などを理解する ○ナイーブアートの特徴を知る ○ナイーブアートを体験する（グループ活動）  	ターとともにクロアチアの人々の暮らし、文化、風習、社会などを理解する。 ○ホームステイ先の画家が描くナイーブアートがどのような技法で描かれていくのかを理解する。 ○ナイーブアートを体験する。 ①トレーシングペーパーにサインを書く ②裏返して、プラスチックの上からなぞる ③空間に自由な発想でアクリルガッシュ（絵具の一種）を使って絵を描く ④芸術性の高い作品に仕上げる	聞記事「天声人語」 資料「バルカン料理」「もの食うひとびと」 資料「ナイーブアートの描き方」 アクリルガッシュ・筆・水入れ・トレーシングペーパー・マジックペン・雑巾・新聞紙・ティッシュペーパー ＣＤ音楽
	○サポーター気分を味わう	○ネオカラーⅡを使ってボディーペインティングを体験する。	ネオカラーⅡ・鏡
まとめ	○自分と世界とのつながりに気づく	○お互いの作品を鑑賞しながら、話し合う。 ○異文化との共生・地球社会における人間理解としてできることはないか考える。	片づけ

(4) **評価の観点**　評価は生徒自身の自己評価やテスト、レポート、参加態度などを総合したものとする。一方的に教え込まれ、答えが明確な講義型学習と参加型学習の大きな違いは、学習のプロセスが重視される点である。違った価値観・考え方を持っている学習者が、それぞれの意見や主張をぶつけ合うことを通して、お互いの価値観や考え方を尊重し共に生きる方法を探るプロセスが大切である。どのくらい主体的・積極的に授業に取り組んだか。参加の度合いがかなり明確に反映される。①異文化体験ナイーブアートでは、グループで協力して、創造的な作品を制作したか。②クロアチアの人々の生活・文化などを日常と比較しながら理解し、お互いを尊重する気持ちが萌芽したか。③テストが終わったら忘れてしまう断片的な知識ではなく、「地球市民」として追究しつづけることの原点となったか。

(5) **指導上の留意点**　①グループ活動は、生徒同士のコミュニケーションが十分図られ、生徒自身が授業の主役となって楽しめるようにする。②美術教材の準備や片付けにも、十分配慮する。③興味を持って取り組んだ体験学習を知識・理解につなげるような指導に留意する。④関連する他の教科・科目、特に公民科の「現代社会」及び「政治・経済」や芸術科の「美術」との関連に配慮する。